

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第3輯

関西国際空港建設に伴う

# 阪南町内埋蔵文化財

—— 分布調査報告書 ——

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

1985. 11. 30

## 序 文



阪南町内埋蔵文化財の分布調査地域は、関西国際空港建設に伴う空港本島の埋め立てならびに前島造成に必要な土砂を採集する地域として、大阪府下十数カ所の候補地から数カ所に限定され、さらに種々の条件検討のうえ土取り場として決定された地域であります。

本地域の埋蔵文化財包蔵地は、あまり多く知られてなく、数カ所の古墳、集落跡、土器散布地が知られているだけです。

今回の分布調査の結果、山城跡、石切場、石仏、集落跡等を確認することが出来た、調査時期・条件があまり適当でなかったが多くの成果をあげることが出来たことは、関係者のご協力の結果と考えられます。

今回、本協会が4月に設立され、その事業目的の一つであります、関西国際空港建設に伴う各種公共事業に先立つ埋蔵文化財の発掘調査事業のうち、直接的な空港建設に伴う事業の予定地を調査することは、本協会の事業目的に合致したものであり、今後共、本事業にかかわる発掘調査等を精力的に取り組んで行く所存です。

本調査を実施するにあたり、大阪府教育委員会、大阪府企業局、阪南町、阪南町教育委員会、その他地元関係者に多大のご協力、ご支援をいただいたことに深く謝意を表します。今後も本協会の調査事業にご支援、ご指導をお願いします。

昭和60年11月30日

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 黒田幸雄

## 例 言



1. 本書は関西国際空港建設に伴う空港島埋立て用土砂採取予定地域（阪南町部分）の埋蔵文化財分布調査報告書である。
2. 調査は大阪府企業局地域整備部内陸整備課の委託を受けて、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
3. 調査は財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査課第3班が担当し、班長渡辺昌宏、技師渋谷高秀、田中一広が現地調査にあたった。調査は昭和60年9月26日に着手し、同年11月30日に終了した。
4. 調査の実施にあたっては、大阪府企業局、大阪府教育委員会、阪南町教育委員会及び阪南町企画課の協力を得た。特に現地では、藤田正篤、藤本透、木下浩良、堀江門也、広瀬和雄、小島成元の諸氏より御教示をいただいた。
5. 本書の執筆、編集は、渡辺、渋谷、田中が分担してあたり、文責は文末に記した。
6. 各地区から採集された遺物の地点（田畑一枚単位）、時代ごとの点数及び詳細な資料については、機会を改め今後の調査の中で報告する予定である。
7. 本文及び挿図中の遺物番号については、写真図版（図版10～12）中で使用した通し番号を用いた。

# 本文目次

序文

例言

第I章 調査経過と周辺の環境	1
第1節 調査経過	1
第2節 周辺の環境	2
第II章 調査区の設定と調査方法	6
第1節 調査区の設定	6
第2節 調査方法	6
第III章 調査成果	9
第1節 各地点の状況	9
第2節 採集遺物	13
第IV章 まとめ	17

# 挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)	3
第2図 調査地区及び各地点位置図 (1/10,000)	7～8
第3図 採集遺物実測図 (1) (1/2)	14
第4図 採集遺物実測図 (2) (1/4)	14

# 図版目次

図版1 調査区航空写真	
図版2 第1・第12地点近景 上：第1地点石切場跡近景 (南東から) 下：第2地点壇状遺構近景 (北から)	
図版3 D地区全景及び第3地点近景 上：D地区平地部全景 (南から) 下：第3地点	

箱作弁財天社近景（南から）

図版4 第5地点全景及び近景 上：井山城跡全景（北から） 下：同上近景（北から）

図版5 第18地点全景及び近景 上：飯ノ峯畑村墓地全景（南西から） 下：同上近景  
（東から）

図版6 第6・10地点近景 上：第6地点方形壇近景（西から） 下：第10地点墓地近景  
（南東から）

図版7 第7・8・9・11地点近景 第7地点石製祠（南東から） 第8地点石碑・石仏  
（南西から） 第9地点石仏（北から） 第11地点石仏（南から）

図版8 第12・13地点石切場跡近景 上：第12地点（北から） 下：第13地点（北から）

図版9 E地区全景及び第15地点近景 上：E地区平地部全景（南から） 下：第15地点  
壘状石垣近景（南から）

図版10 採集遺物（1） 上：石器・剥片 下：土錘

図版11 採集遺物（2） 上：土師器 下：須恵器

図版12 採集遺物（3） 上：磁器・陶器 下：瓦・瓦器

# 第 I 章 調査経過と周辺環境

## 第 1 節 調査経過

関西国際空港は、泉佐野市沖合の大阪湾内に埋立て工法によって建設される予定である。その建設に伴って必要となる埋立用土砂の採取予定地が数カ所設定された。今回調査を実施した阪南町域内の対象地についてもその一つである。このような計画を受けて、当該地域の文化財調査については、昭和60年7月に大阪府教育委員会文化財保護課と大阪府企業局地域整備部内陸整備課との間で協議が行なわれた。協議結果に基づいて大阪府教育委員会は、当協会に対し文化財の確認を目的とした分布調査の実施を指示した。同年9月当協会と大阪府企業局との間で調査の委託契約が結ばれ、9月26日より調査準備に取り掛かった。

現地踏査は、昭和60年10月8日から開始し、同年11月20日にて終了した。11月21日から11月30日までの間に整理作業及び報告書作成作業を実施した。

調査は対象範囲を大きくA～Eまでの5地区に分割し（本書第II章参照）、A、B、D、C、Eの順で実施した。その結果21ヶ所の遺跡及び石造物等を発見している。特に平地部分（D地区19・20、E地区21—第2図参照）では、現河川部分を除く範囲内全体で、縄文時代から江戸時代までの遺物を採集することができた。また水田、畑一枚ごとの遺物散布状況についても把握することに務めた。その結果遺物散布密度から判断して、ある程度平地部分での遺跡範囲を想定することも可能である。

しかし平地部分であっても、雑草、雑木等の繁茂する場所及び盛土地、住宅地等については表面観察が不可能であり、今回の調査では確認できなかった。（第2図参照）

以上のように今回の分布調査では、予想を遙かに越える多大な成果をあげることができた。以下その詳細について報告していくことにする。（渡辺）

## 第2節 周辺の環境

大阪府の南部、阪南町の位置する泉南地域は、基盤山地である和泉山脈より丘陵及び洪積段丘高位面が派生し、縁辺部には洪積段丘中位面や低位面が形成されている。また、河川の下流には沖積段丘や氾濫原が存在する。

今回の調査地は、和泉山脈の一部から低位段丘面や沖積段丘面を含んだ部分である。その基盤層の地質は殆ど白亜紀に形成された和泉砂岩層、第三紀末から第四紀洪積世にかけて堆積したと言われる大阪層群から成り立っている。

現地は山林及び水田、畑地が広がり和泉山脈が海岸近く迄迫り、大阪湾に面した平地はことのほか狭い。山脈を浸食して流れる河川にそって自然村落が営まれており、泉南の農・漁村風景が広がっている。

しかし、近年は大阪湾に面した山地部で大規模な住宅建設・造成が進み大阪のベッドタウン化による、人口の増加も著しい。各所でその景観も変貌しつつある。

人間の遺跡との関わりについては、後期旧石器時代に遡る。深日の宝樹寺にある紀淡海峡から引き上げられたナウマン象・オオツノジカ等の化石骨は、旧石器人と共に大陸より渡った産物であろう。縄文時代になると、遺跡数は増し集落跡も知られる。草創期の有舌尖頭器、石匙、石鏃等が、男里川左岸の玉田山遺跡や蓮池遺跡より採集されている。また、低位段丘を囲む丘陵縁辺部の寺田山遺跡、岩崎山遺跡、石田山遺跡から石器が出土しているが、詳細はわからない。後期になると、岬町の淡輪遺跡に数棟の堅穴住居群も出現する。また今回、チャート製の石鏃等を貝掛の段丘で採集しており集落が充分予想できる。いずれにしても和泉地域全体をみると立地は、低位段丘の縁辺、砂丘へと変化するようである。

弥生時代前期の遺跡は、沖積段丘に立地する男里遺跡で土器が出土している。

更に、神光遺跡では方形周溝遺溝や蓮池遺跡や三味谷池遺跡・田山遺跡からは、中期から後期にかけての土器、石器が検出されている。また三升五合山からは、石器等が採集されていて高地性集落の可能性もある。男里遺跡は弥生時代を通じ集落と墓域が所々判明してきているが、その他の遺跡についてはまだまだ追求する問題を残している。

古墳時代の集落も弥生時代と立地を同じくすると思われるが、今回、箱作・貝掛地区において須恵器等を採集しているので集落跡が、予想される。

古墳の分布としては、前期古墳が全くみられない地域であり中期に至って岬町域の平野



第1図 周辺遺跡分布図

番号	遺跡名	種類	時期	番号	遺跡名	種類	時期
1	天神ノ森遺跡	集落跡	古墳時代	11	岩崎山遺跡	散布地	縄文時代
2	男里遺跡	〃	弥生～中世	12	寺田山遺跡	〃	〃
3	光平寺石造五輪塔	府指定建造物	中世	13	玉田山古墳群	古墳 2 基	古墳時代後期
4	平野寺跡	寺院跡	平安時代	14	玉田山遺跡	散布地	縄文時代
5	皿田池古墳	古墳	古墳時代	15	三升五合山遺跡	散布地	弥生～中世
6	三味谷遺跡	集落跡	弥生～古墳	16	塚谷古墳群	円墳 3 基	古墳時代後期
7	蓮池遺跡	〃	縄文～中世	17	貝掛遺跡	散布地	弥生～中世
8	神光寺跡	寺院跡、集落跡	弥生～中世	18	箱作古墳	前方後円墳	古墳時代
9	高田山古墳群	古墳 4 基	古墳時代	19	田山遺跡	集落跡	縄文～中世
10	石田山遺跡	散布地	縄文時代				



部に造り出しの付く大型円墳の西小山古墳、宇度墓・西陵古墳の大型前方後円墳を中心とした淡輪の古墳群が突然出現する。後期古墳の鴻ノ巣山古墳群・久保谷古墳群・寺山古墳群といった群集墳も他の泉南地域に比べ数・内容共優越して出現してくる。これらの造営者は、生産基盤としての単なる農・漁業集団とは考えがたく、立地条件・石室など主体部の構造、外部施設の埴輪等紀伊との政治的關係が浮かび上がってくる。

阪南町域では消滅はしているが茶屋川左岸段丘上に全長38mの小型前方後円墳とされる箱作古墳が存在する。内容は不明であるが造営を中期後半とすると極めて在地性の強い古墳と言えよう。後期には横穴式石室3基で構成される塚谷古墳群や横穴式石室、箱式石棺を主体部とする玉田山古墳群や高田山古墳群がある。一造営単位で単位群を成立させ散在しているに過ぎないこの現象は、貝塚・佐野・泉南地域の特色と言えよう。

次に、歴史時代であるが、飛鳥・白鳳の寺院跡等は存在しない。奈良時代になって田山遺跡に集落が現れると思われ、遺物がまとまって出土している。また男里遺跡からは、掘立柱建物の倉が確認されている。平安時代以降に神光寺や医王寺といった寺院ができるが、廃寺となって遺構すら定かでない。

また、日根郡の観心寺領鳥取の荘、加茂社領箱作荘にあたっており社寺との結び付きも強かったことが推察される。これは、中世を通じて田山遺跡や貝掛遺跡の段丘に瓦器・土師器・陶磁器がかなり散布していることも合致する。

その遺物は、和泉のみならず紀伊の搬入品がより多くみられる。これは、中世、近世を通じて熊野詣で、あるいは紀州根来寺と信仰・経済的・政治的・軍事的に盛衰を共にしたことの道筋であったことも関連してくる。

この頃の集落は現在の自然村落と重複する立地と思われる。そして溜池を作って洪積段丘の開発を積極的に行ったのもこの頃であろう。

最後に記しておくことに、「箱作」の地名が示すように、和泉砂岩の唯一の産出場であり、中・近世・近代を通じ石を切り出していた石工集団が存在した点である。その搬出されたものは、日常生活石製品から墓石に至る迄さまざまなものに利用・加工され和泉・河内・大和を中心に近畿圏に広く流通している。例えば、考古学的資料の1つである墓石の一石五輪塔婆等の搬路・数にはすさまじいものがあるといえよう。

ごく簡単に考古学的な側面で地域の動向を把えてきたがまだまだ不明な点、空白部分があり、解決されなければならない問題も多岐にわたる。今後の調査の進展によって多くの知見が予想されるが分析を積み重ねることによって阪南町域の歴史を徐々に、より明確に

して行かなければならない。(田中)

<阪南町関係埋蔵文化財文献抄>

1. 根来治 『東鳥取村史』東鳥取村役場 昭和33年6月
2. 町史編纂委員会編『阪南町史 上・本文編下・史料編』阪南町役場 昭和52年10月・58年3月
3. 田中英夫 「下荘の製塩・漁業遺物」「蓮池二題」『町史こぼれ話』阪南町町史編纂委員会 昭和57年3月
4. 堅田直 『大阪府泉南郡東鳥取町玉田山古墳発掘調査概要』大阪府東鳥取町玉田山古墳調査団 昭和36年12月
5. 藤沢一夫 「玉田山上方下円墳―泉南郡東鳥取町自然田―」『大阪府教育委員会月報』18-3 昭和41年3月
6. 中西靖人・辻内義造 『大阪府泉南郡阪南町自然田地区埋蔵文化財分布調査報告書―大正不動産KK開発予定に伴う―』大阪文化財センター調査報告II 昭和48年3月
7. 久米雅雄 『玉田山遺跡発掘調査報告書―大阪府泉南郡阪南町自然田所在―』阪南町埋蔵文化財発掘調査報告I 阪南町教育委員会 昭和57年3月
8. 中西靖人・辻内義造 『泉南郡阪南町鳥取地区埋蔵文化財分布調査報告書』大阪文化財センター調査報告X XI 昭和51年3月
9. 久米雅雄 『神光寺跡発掘調査報告書―大阪府泉南郡阪南町石田所在―』阪南町埋蔵文化財発掘調査報告II 阪南町教育委員会 昭和57年3月
10. 酒井龍一・国乗和雄 『淡輪・箱作海岸地区・海岸環境整備事業に伴う田山遺跡試掘調査報告』大阪文化財センター調査報告X X X 昭和54年1月
11. 国乗和雄・小島成元 『田山遺跡―淡輪・箱作海岸地区海岸環境整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)大阪文化財センター 昭和58年3月

## 第II章 調査区の設定と調査方法

### 第1節 調査区の設定

分布調査の対象となった地域は、和泉南端、男里川より更に南方に位置する积迦坊川、茶屋川周辺の平野部と山岳部を包括する地帯である。面積は約326ヘクタールである。地理的には、和泉南端で、紀伊に隣接し、山岳・丘陵及び海によって、四囲を画され、一つの完結した地域である。

調査地域が非常に広いため、調査区は、地形によって平地部と山地部に大きく二区分した。更に平地部分については、二区分（D・E地区）、山地を三区分（A・B・C地区）し、分布調査を実施した。（第2図参照）

### 第2節 調査方法

积迦坊川から田山川に至る地域を対象とした既往の発掘調査は、田山川水系については、田山遺跡<sup>註1</sup>が、茶屋川水系では箱作遺跡<sup>註2</sup>が、积迦坊川水系では、塚谷古墳群<sup>註3</sup>が各実施され、大きな成果を上げている。しかし、今回分布調査の主要な対象となった茶屋川両岸に広がる平地部や、貝掛遺跡が所在する积迦坊川の両岸に広がる平地部、及びは、両河川の上流域に広がる山岳地帯に対する調査例はない。とりわけ、山岳地帯については、飯ノ峯川左岸に位置する山間部に「井山城」の伝承をもつ地域以外は考古学の対象として扱われた事がなく、まったく未調査の地域である。

分布調査<sup>註4</sup>は、地表面の観察とボーリングステッキによる土層観察、遺物表面採集を基本としておこなった。地図は、新版1/2,500の都市計画地形図を使用した。

#### 山地部分

険しい山谷を対象とした分布調査については、解決しなければならない未知数の問題も多いが、今回我々は、地形図より想定される遺跡の概念を一切捨て、尾根線上、谷底地、傾斜地など、山地の全ての地表面を調査対象として踏査をおこなった。しかし、分布調査実施時期の点から、雑木が繁った傾斜地については、一部調査対象から除外した地域もある。

#### 平地部分

积迦坊川、茶屋川両岸に広がる平地部分に対しては、道路・河川・盛土・屋敷地など踏



査不可能地域を調査範囲から除外し、残りの田畑・果樹園などを対象として分布調査をおこなった。調査にあたっては、田畑一枚に一番号を付し、遺物採集は、これを一単位として実施した。調査では、調査者の恣意性や偶然性を一切排除するため、田畑一枚に横一列にならび、遺物採集を実施した。田畑一枚を一単位に採集した土器片・石器片については、時期別散布の傾向や、遺物散布密度などを把握するための基礎資料となるものである。平地部の詳細なデータについては現在整理中である。（渋谷）

註1 『田山遺跡』（財）大阪文化財センター 昭和58年3月

註2 昭和46年に大阪府教育委員会が分布調査を実施した。

註3 昭和50年11月 大阪府教育委員会によって発掘調査が行われた。

註4 分布調査の準備段階において、多くの先人の蓄積を学習したが、実際参考とした主要な文献には、萩本勝『岡村遺跡確説調査概報』和歌山県海南市教育委員会 昭和55年がある。

## 第三章 調査成果

### 第1節 各地点(区)の状況

#### 第1地点

標高約46mの山地先端部南側斜面より、和泉砂岩の石切場跡と思われる遺構を検出した。対象地の地区割りでは、D地区の西側に含まれる位置にある。時期については不明である。

#### 第2地点

標高45～50mの山地先端部分で、近世の瓦を使用した基壇状の遺構が2箇所認められた。祠の基壇になる可能性が大きい。江戸時代後期に属する。

#### 第3地点

標高約96mの山地尾根部に、現状で「弁財天」が存在している。その周辺部には近世の瓦及び土器類が多量に観察された。また、「享和元年（1801年）」の鳥居及び「文久年間（1861～1864）」年に造られた石燈籠、手洗石、石仏等が存在し、今も信仰を集めている。

#### 第4地点

標高約95mの山地南側斜面で近世の土器が採集された。土器の散布は認められたが、遺跡の性格については不明である。

#### 第5地点

標高約90～140mにかけての山地尾根筋に沿って山城跡と思われる部分を発見した。この場所については、地元でも城跡の伝承がのこっている。

また『城郭大係<sup>註1</sup>』によれば、「井山城<sup>いやま</sup>」として説明されている場所に相当する。尾根上には4箇所<sup>註1</sup>の平坦部があり、北から2つ目の平坦部と3つ目の平坦部の間には空堀状の窪みが確認された。時期を決定する遺物は採集できなかったが、文献では「正和三年（1314年）」に築造されたことになっている。

#### 第5'地点

第5地点の東側で、飯ノ峯川の形成した谷を挟む対岸の山地である。標高約110m前後を測り、山城跡と考えられる平坦部分で堀割状の溝が確認された。

第5地点の山城跡と共に、伝承に残る「井山城」の一郭を成す可能性が大きい。

#### 第6地点

石で囲んだ方形の壇が発見された。この地点は飯ノ峯川の取水口に当たっており、水神を祭った祠の基壇になる可能性が大きい。次に説明する第7地点の古社が存在したと考えられる。

#### 第7地点

飯ノ峯川の右岸で谷部分に設けられている。標高は約60mであった。ここでは江戸時代に作られたと思われる和泉砂岩製の祠を確認した。前の道が紀伊へ通じる街道である。石仏の存在する地点は、前面に空間地が開けていた。

#### 第8地点

標高約70mで、西向きの尾根斜面より3体の石仏と「南無阿弥陀仏」の文字が刻まれた石碑が1本認められた。いずれも和泉砂岩製であり、江戸時代後期頃のものと思われる。

#### 第9地点

第8地点の東側に道標を刻んだ石仏が存在する。標高約80mで、第7地点と同一の尾根上に立地していた。道標には「右○○○」「左○○○」の文字が刻まれており、飯ノ峯川に沿って和歌山へ通じる街道の存在を証明する資料といえる。石材はいずれも和泉砂岩で、江戸時代後期以降に属するものようである。

#### 第10地点

標高約90～110mにかけて、西側へ開口する谷の斜面を利用して墓地が作られている。墓石の年号から室町時代以降墓地として使用されているようである。その他、五輪塔、十

三体仏、「正徳（1711～1716）」の年号が入った地藏等が発見された。墓地はかなり埋没しており、18地点墓地の旧地である可能性が高い。

#### 第11地点

標高約170mに設けられた溜池の岸近くに石仏を一体発見した。和泉砂岩製の小形の石仏で、後世の覆屋に納められている。「応永〇年（1397～1428年）」の年号が刻まれており、室町時代前半期に属する。現在は池の守護神として祀られている。

#### 第12地点

標高約240mの山地北側尾根筋に沿って、和泉砂岩の石切場跡を発見した。第10地点に比較してやや小規模であるが、極めて類似した遺構といえる。時期を決定できる遺物は認められなかった。

#### 第13地点

標高170～180mにかけての尾根筋に大規模な石切場跡を確認した。尾根に直行して、和泉砂岩の岩脈を切崩した痕跡が数カ所で認められた。その周辺部には石臼の未成品及び剝片類が多量に散布している。また切出した石を運び出すための通路等も存在しており、石材の採掘から荒加工・運搬までの工程を解明できる貴重な遺跡である。『五畿内志』『和泉名所図会』等に印されている「箱作」の地名由来を証明する遺跡とも言えよう。時期については不明である。

#### 第14地点

飯ノ峯畑村の社である。和泉砂岩製の燈籠等が存在し、現在も信仰を集めている。

#### 第15地点

C地区の東側部分に位置する。桑畑から和歌山へ通じる旧街道に接する山地上で、一辺30cm前後の角礫を2段から3段に積み上げた石垣が発見された。この山地は標高110～130mにあり、石垣は頂上部分を三重に取り巻いている。山城跡になる可能性が考えられるが、表面観察のみで遺構の性格を決定することは難しい。

#### 第16地点

E地区中央部分西側で和泉砂岩製無縫塔を1基発見した。山地裾部に沿って走る道の東側に設けられていたが、現状から判断して本来設置された場所から動かされている可能性が大きい。無縫塔は僧侶の墓標として設けられる場合が多く、墓地に設置されていたものであろう。時期は江戸時代である。

#### 第17地点

E地区南端部の東側山地斜面より、第15地点と類似する石垣を発見した。標高80～100mにかけての山地斜面部分に、約30cmほどの角礫を2段から3段に積み上げた石垣が五重に存在する。第15地点のように周囲を取り巻いては配列せず、斜面側のみで認められた。分布調査による表面観察だけでは、その性格を判断することはできないが、山城跡等の可能性もある。

#### 第18地点

飯ノ峯畑村の墓地である。墓石の年号から見て室町時代末期から江戸時代を通じ、現在も墓地として使用されている。「天和四年（1684年）」の年号が入った六地藏や棺台も存在した。一石五輪塔は確認できないが、舟形、地藏等の石造物は多く認められた。

分布調査地外の周辺墓地では、和泉砂岩の一石五輪塔が主流を占めるのに対して、当墓地は地藏信仰による地藏墓石である点興味深い。

#### 第19地区

D地区の西端平地部分及び谷部分に相当する。標高は27～45mあり、谷奥部分は雑草が繁茂し、踏査ができなかった。平地部分の幅は、北側で約125m、奥側で約30mである。北側部分で、より濃密に遺物が採集された。

#### 第20地区

D地区の東側平地部分を指す。この地区は海岸に面した部分（箱作集落の東側から貝掛集落西側）と飯ノ峯川の流れる谷部分（飯ノ峯畑地区）から構成される。標高は北側で11m、谷奥部分で85mを測る。海岸部分は、市街化が進んでおり、住宅、工場等のため表面観察が不可能であった。また谷奥部分はかつて畑等に利用されていたが、現在は荒地化しており、雑草、雑木が茂って踏査できない。

##### 〔海岸平地部分〕

「指出森神社」の南側及び「菅原神社」の北側部分で多量の遺物が採集できた。遺物は古墳時代から江戸時代まで各時期のものを含み、奈良時代の遺物も認められる。

##### 〔飯ノ峯川谷部分〕

中央部分との幅は東西約100mほどである。水田や畑部分等を中心にして縄文時代から江戸時代まで各時期の遺物が散布していた。

#### 第21地区

E地区の範囲である。北側の海岸平地部分は、貝掛集落の東側から鳥取集落の西端部までを含む。中央から南側にかけては、釈迦坊川が流れる谷部分をほぼ包括する。標高7～



62mであり、谷部分の幅も海側で約300m、山側で約30mを測る。鳥取集落側は、マンション、住宅等が建設されており調査ができなかった。また谷の南側についてもグラウンドの盛土及び雑草等によって踏査が不可能であった。

遺物の散布状況には若干の粗密があるものの、ほぼ全域に亘って確認できる。時期的には縄文時代から江戸時代にかけての各時期の土器片、石器類等が認められた。

(渡辺、田中)

註1 『城郭大系』—大阪兵庫編— 新人物往来社刊 昭和56年3月

## 第2節 採集遺物 (第3、4図 図版10~12)

縄文時代から江戸時代にかけての各時期の遺物が採集された。数量的には破片数にして約1,000点近くの遺物が認められる。その大部分は平地部(D、E地区)に集中しており、海岸平地側及び谷の開口部でより多い傾向を示した。

### 縄文時代

この時期に属する遺物としては、石器が認められる。石鏃、削器、剝片類が大部分で、石材にはチャート、サヌカイトを使用していた。

#### 石鏃(1, 5)

1の石材は青色のチャートで、小形の凹基無茎式になる。二次調整剝離が丁寧に施されており、全体に精巧である。先端をわずかに欠損していた。前期に相当すると思われる。5は先端と基部を欠損していた。石材はサヌカイトを使用しており、大形の凹基無茎式である。二次調整剝離は粗雑であり、形態と加工の点から見て後期ごろのものではなからうか。両者ともE地区より採集された。

#### 削器(2, 3, 10)

2, 3の石材は青色のチャートである。10の石材はサヌカイトである。3点ともE地区平地部分で採集された。共に欠損しており全体の形状は不明であるが、刃部と思われる部分には二次調整剝離が密に加えられている。3については、使用による刃部の磨滅が観察された。10は自然面を残している。それぞれの時期については不明である。

#### 剝片(6~8, 11)

全て石材はサヌカイトである。E地区平地部で採集されており、8と11のみ自然面をもっていた。時期は不明である。

弥生時代

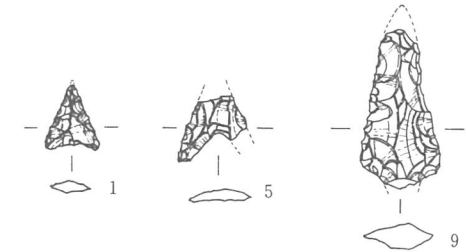
この時期は、石器及び剥片と土器が採集された。ここでは石器のみを提示している。

石鏃 (9)

石材はサヌカイトを用いており、先端と基部が欠損している。E地区平地部で採集された。凸基有茎式のやや大形品と思われる。時期は中期頃に相当するのではなかろうか。

石庖丁 (12)

E地区平地部で採集された。石材は粘板岩と思われる。全体に薄手であり、欠損していた。刃部は片刃である。



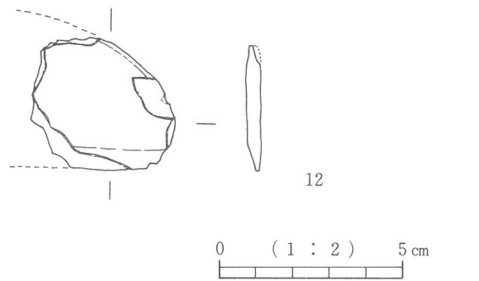
古墳時代

土師器、須恵器、土錘等が認められた。ここでは須恵器と土錘を提示する。

須恵器 (32, 39)

共にE地区より採集されている。32は杯蓋の口縁部破片で、39は甕の体部破片である。

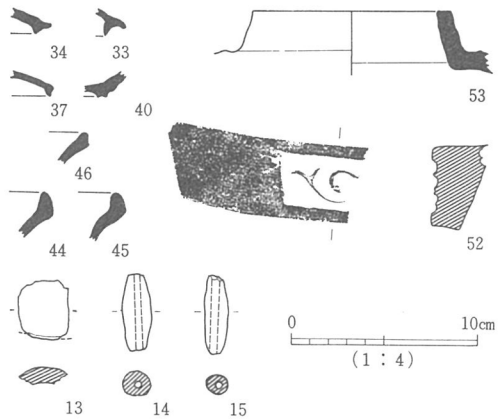
32は6世紀前葉から中葉ぐらいに位置づけられるのではなかろうか。39については詳しい時期は不明である。



第3図 採集遺物(1)

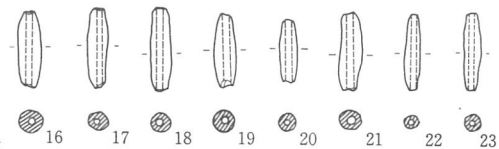
土錘 (13)

D地区海岸平地部より採集された管状土錘の破片である。詳細時期は不明であるが、中期頃の中形土錘になるとと思われる。おそらく曳網の沈子として使用されたものであろう。



飛鳥時代

この時期と認定できる遺物には須恵器がある。採集地点はE地区の海岸平地部に集中する傾向を示した。



第4図 採集遺物(2)

### 須恵器 (33～36)

33～35は杯蓋の口円部破片である。36は杯身口縁部破片になると思われる。いずれもE地区の平地部海側の部分からで採集された。7世紀前葉から中葉にかけてのものが多く、33は前葉に位置づけられよう。

### 奈良時代

この時期に属する遺物としては、須恵器がある。

#### 須恵器 (37, 38, 40～42)

それぞれの器種は、37杯蓋口縁部、38杯身口縁部、40杯身底部、41甕体部上半、42長頸壺体部に相当すると思われる。40に代表されるように、8世紀後葉のものが多く認められた。採集地区は37, 40がE地区平地部分から、38, 41, 42がD地区平地部分である。

### 平安時代

黒色土器、土師器、須恵器が採集されている。ここではE地区から採集した黒色土器碗底部(24)を取りあげた。おそらく黒色土器B類になると思われるが、表面の磨滅が著しく明確ではない。時期的には末葉に相当すると思われる。

### 鎌倉・室町時代

この時期の遺物としては、土師器、須恵器、瓦器、磁器、陶器、瓦、土錘、蛸壺等がある。ここでは土師器、蛸壺、磁器、陶器類のみ提示した。量的には、江戸時代に次いで多量に採集された。

#### 土師器 (25～28)

採集地区は、25, 26, 28がE地区平地部分、27がD地区平地部分である。25, 26は口縁部破片であるがいずれも小片で磨滅が著しいため、器種及び時期については不明瞭と言わざるおえない。

#### 蛸壺 (29～31)

土師質で器壁が厚く、かなり大形になると思われる。田山遺跡<sup>註1</sup>や男里遺跡<sup>註2</sup>においても同様な蛸壺が出土している。採集地区は、29がD地区平地部、30と31はE地区平地部であった。29はやや外反ぎみに開く口縁部の破片で、口縁端部の肥厚が目立つ。30はおそらく体部破片になると思われる。31は平底状の底部で、内面に横方向のナデが観察できた。時期的に

は、おそらく室町時代に含まれるもののようである。

#### 磁器 (43)

E地区平地部で採集された、青磁碗の体部破片である。小片であるため時期は決め難いが、室町時代に属するものであろう。

#### 陶器 (44～49)

全てE地区の平地部分で採集した。44～46は東播系の捏鉢口縁部破片である。いずれもやや薄手であり、14世紀後半頃のものではなろうか。47～49は甕の体部破片になると思われる。49は備前焼の可能性が大きい。

### 江戸時代

採集遺物の6割近くはこの時期の遺物であり、D、E地区平地部のほぼ全面に散布していた。主な遺物としては、陶器、磁器、瓦、瓦器、土師器、土錘等が認められる。今回は土錘、陶器、瓦、瓦器類を提示した。

#### 土錘 (14～23)

これらは、ほとんどが刺し綱の沈子として使用されたと思われる。この種の管状土錘は、中世ごろから形状の変化が乏しいため、この中には若干古い時期のものが含まれている可能性もある。14～23は全てE地区の平地部分より採集された。

#### 陶器 (50, 51)

この2点は共にE地区平地部より採集された。50は小形壺の頸部から体部にかけての破片である。51は甕の体部破片になると思われる。

#### 瓦 (52)

この軒平瓦は、A地区第2地点(第2図参照)基壇状遺構の土留めに使用されていた。江戸時代後期に相当するものであろう。

#### 瓦器 (53, 54)

この2点は、A地区の第4地点(第2図参照)より採集された遺物である。共に口縁部破片で、時期的には江戸時代後期のものであろう。器種は53が火鉢等になる可能性が大きく、54は蓋等の一種になるのではなかろうか。(渡辺)

註1 『田山遺跡』(財)大阪文化財センター 昭和58年3月

註2 『男里遺跡発掘調査報告書II』泉南市教育委員会 昭和56年3月

## 第Ⅳ章 まとめ

和泉地域の地形的特色として、低位段丘面を主とする海岸平地部の発達をあげることができる。しかし男里川流域を一つの境として、それより南西部においては和泉山脈が海岸近くまで迫り平地部は極めて小面積となる。それと同時に、山脈を浸食して流れる河川に沿って、南北に延びる狭あいな谷地形を観察することができる。またこの谷は、古来「紀伊」との重要な交通路として利用されてきた。

今回分布調査を実施した、釈迦坊川、飯ノ峯川、茶屋川流域の一带は前述したように、地形的にも歴史的にも一つのまとまりをもつ小地域として認識することが可能である。

この地域の考古学的な研究及び調査活動は近年活発になりつつあるが、和泉地域の中にあっては解明すべき多くの課題を残したフィールドと言えよう。空港建設に伴う大規模な開発が目前に迫った現在、その追究は急務と思われる。このような状況のもとで実施される分布調査の重要性を考慮した我々は、準備段階から調査方法、調査計画の検討を中心とした討議を重ねた。

調査実施段階に至っては、標高200mにも及ぶ険しい地形と実施時期の季節的影響による雑草木類の繁茂等に障害された。このため山地部分については、尾根と谷筋に沿った踏査が中心的であった。それに対して、平地部分での調査は調査方法の面も含めて多くの成果を得ることができた。全体的には、前章で説明したとおり当初の予想を越える多く遺跡と広大な遺物散布地を確認することができた。その点では初期の目的を、ある程度達成できたと考えている。

山地部の遺跡では、特に山城跡、石切場跡等の興味深い遺跡が含まれている。またこれらの遺跡は、この地域における考古学的な調査例が少ないことと合わせて見ても、今後地域史の解明に多くの影響を投ずると思われる。平地部で確認できた広大な遺物散布地については、その密度から判断して複数のまとまりが認められる。このことは、縄文時代から江戸時代にかけての集落跡等の遺跡が今後数カ所で発見される可能性を暗示している。いずれにしても、遺跡の内容をより正確に把握する作業として地形測量、試掘調査等が必要であると考えられる。

また今回の調査対象範囲内では、他地域と比較してより多くの石造物が存在することを確認した。大部分の石材は和泉砂岩であり、石切場跡との関係が問題となる。それと共に石工集団の存在を解明する重要な証しでもある。正確な記録を作成すると同時に、地元の

聞き取り調査を含めた民俗学的な調査を実施する必要があると思われる。

最後に、今回の調査によってある程度輪郭が明瞭になりかけたこの地域の歴史像を、より具体的に追究する作業が残されている。その作業を通して泉南地域の現在を確認することが我々に課せられた責務でもある。（渡辺、渋谷、田中）

# 図 版

図版一 調査区航空写真





第1地点石切場近景（南東から）



図版一  
第1・2地点近景



第2地点壇状遺構近景（北から）



D地区平地部全景（南から）



第3地点箱作弁財天社近景（南から）



井山城跡全景（北から）



同上 近景（北から）



飯ノ峰畑村墓地全景（南西から）



同上 近景（東から）



第6地点方形壇近景（西から）



第10地点墓地近景（南東から）

第7地点石製祠(南東から)

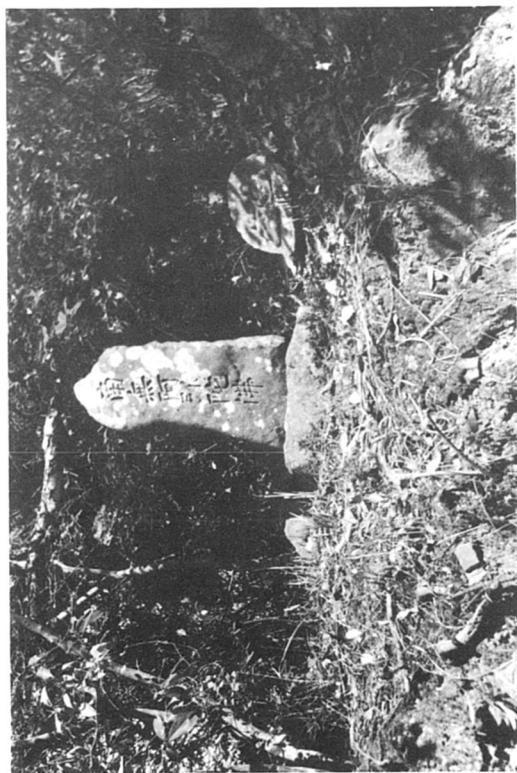


第11地点石仏(南から)



図版七 第7・8・9・11地点近景

第8地点石碑・石仏(南西から)



第9地点石仏(北から)





第12地点（北から）



(写真中央は石臼未製品)

第13地点（北から）

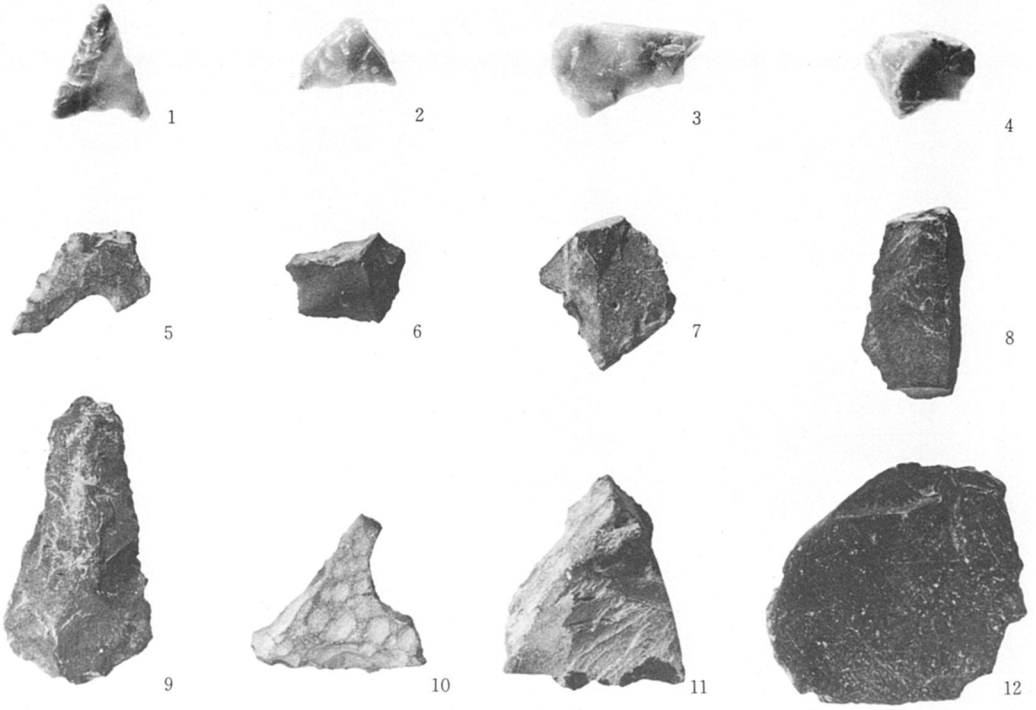


E地区平地部全景（南から）

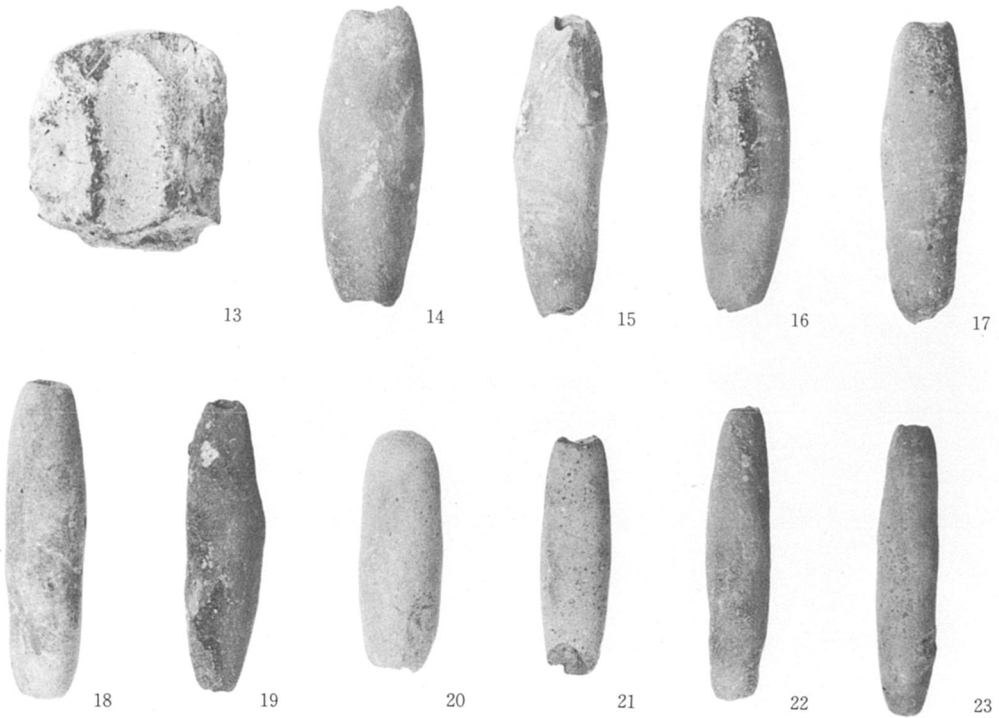


第15地点墨状石垣近景（南から）

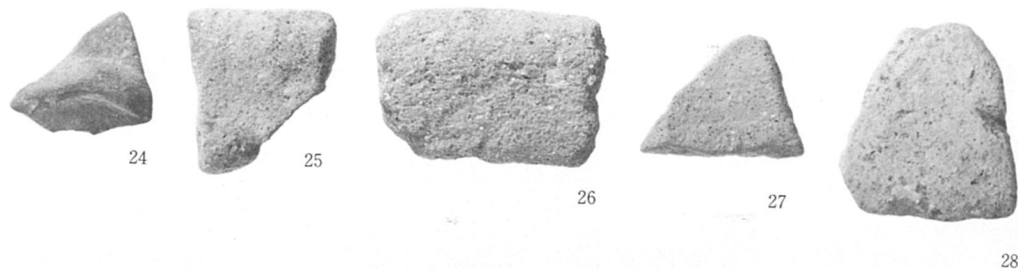




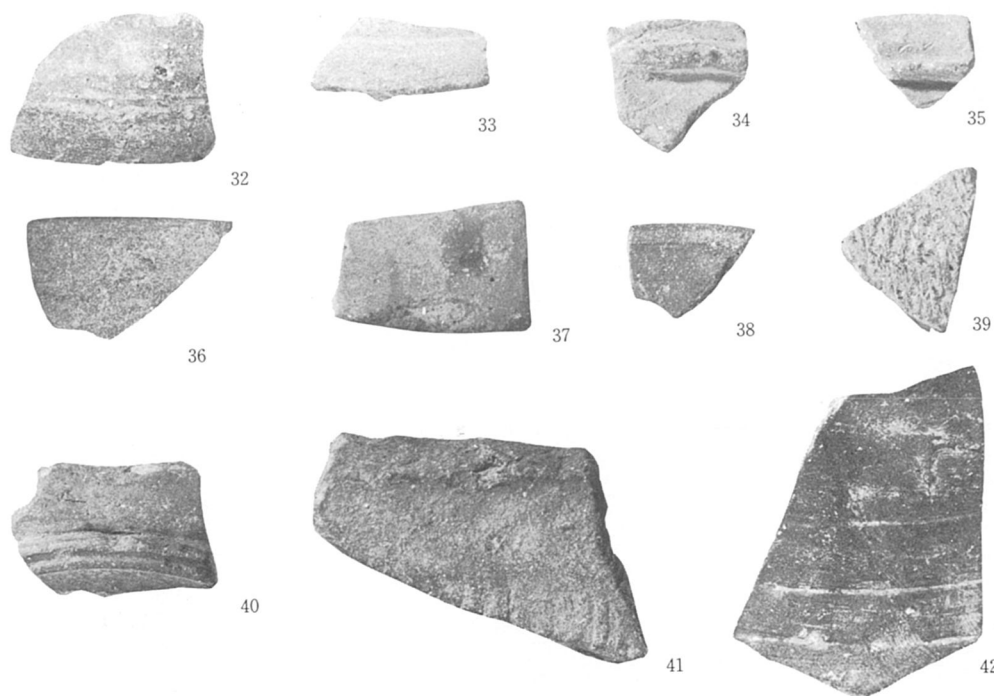
石器・剥片



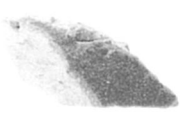
土錘



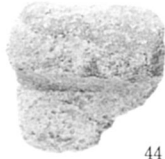
土師器



須恵器



43



44



45



46



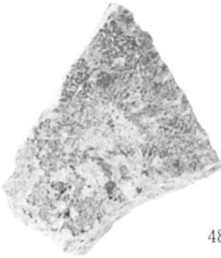
47



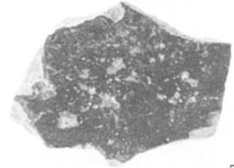
49



50



48

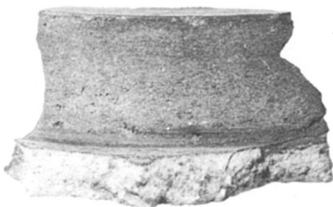


51

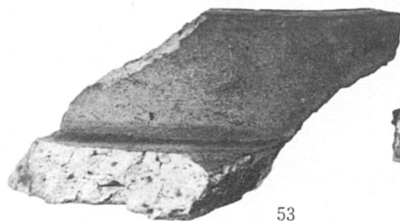
磁器·陶器



52



53



54

瓦·瓦器

(財)大阪府埋蔵文化財協会報告 第3輯

関西国際空港建設に伴う

## 阪南町内埋蔵文化財

—分布調査報告書—

昭和60年11月30日発行

編集・発行 財団法人 大阪府埋蔵文化財協会  
大阪市東区谷町2丁目36番地大手前ウサミビル

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所